栗東の民具

—栗東歴史民俗博物館登録民俗資料から—

栗東歴史民俗博物館　学芸員　田母神克幸
(仮称)大阪市立住まいの博物館準備室　学芸員　明珍　健二

はじめに

人口５万人を突破し市制施行を待つばかりとなった栗東町は、昭和29年の町村合併によって誕生しています。栗東町域は、古くから畿内と東山・東海道を結ぶ交通の要衝地として栄え、周辺地と交流を繰り返しながら発展してきた歴史性に富んだところです。新開古墳をはじめとした多くの古墳群、栗太郡衙と比定される岡遺跡、渡来系文化の影響を受けたわが国有数の狛坂磨崖仏、平安時代に開花した金勝寺の仏教美術、東海道・中山道に沿った街道の村々のにぎわいを示す史跡や文化財など、歴史と文化の交流を物語る多くの見所を今に伝えています。

こうした文化財とは質を異にしますが、われわれの祖先が日々暮らしていくために必要とした道具のひとつに民具があります。一般には有形民俗文化財と呼ばれ、生活習慣や生産技術、あるいは祭りや年中行事などの無形民俗文化財と区別されています。こうした身のまわりにある生活道具は、その役割を終えてしまえば廃棄されたり処分されるのが常とされます。先人たちが生活を繰り返すために知恵をしぼり工夫してきた民具は、時代とともに人々の暮らしを支える道具であると同時に、時代を映し出す鏡でもあるのです。

ところが、昭和38年に名神高速道路が栗東－尼崎間で開通し、44年にはＪＲＡ栗東トレーニングセンターが開場し、地域開発が進展し急激な人口増加につながっていきました。また、高度経済成長期を経て近代化が進められた栗東地域でも、それまでの基幹産業であった農業も機械化がはかられ従来の手作業による伝統的な農業は、影も形もなく消え去ってしまいました。同時に電化製品や自動車の普及は、永々として日本人が培い育んできた生活様式さえも変えてしまいつつあります。

栗東町では、新しい都市展望を開くため60年に策定した自然休養公園構想の一環として、61年に歴史民俗資料館準備係を設置し、歴史資料、美術工芸資料、考古資料とともに、失なわれていく民俗資料の調査、収集をスタートさせました。

民具所在調査と分類

民具所在調査を開始するに当たり、町域を江戸時代の藩政村を基本として35地域に分けそれぞれに地区番号を付け、さらに調査した家順に家番号をつけました。また、実際の資料確認作業には、地元老人クラブからの推薦によって民具調査協力員を委嘱して、実際に調査員が村を訪れた際には、水先案内の役目を引き受けていただきました。こうして61年度から63年度までの３か年に調査させていただいた軒数は約500軒、生活道具・生産用具約6,000点におよぶ民具の所在を確認しました。調査の際には、１軒の家でなるべく多くの資料を記録化することを心がけ、桶ならば一軒でどれほどの数量が必要とされたか、用途の違いによって形状がどのように違うのか、その製作者は誰なのか、いつごろ使用されたのかなど、写真や略図をとりながら作業を進めるように心がけました。

所在調査で確認された資料はすぐにカード

化されていきます。6,000点におよんだ資料は整理作業によって分類され、地域的な特徴を示す結果を得ました。まず、農業を基幹産業としてきた地域を裏付けるように、農業で使用される道具が圧倒的に多く約500点、次に普段着・作業着などの衣類が約470点、さらに綿作地帯であることをしめす機(はた)織りに関する道具が約350点、食事関係用具が約300点、住居関連が約250点となり、滋賀県南部にあって昭和30年代まで水田耕作を基本としながら裏作に菜種・麦を栽培し、綿をも栽培して手織の衣服を作り、豊かな祭礼や年中行事を執り行ってきた農村地帯であることが浮き彫りにされました。一方、町域の半分を占める金勝山地を擁しながら、山林に関する用具がほとんど確認されなかったことは、近代に入るまで山が荒れていたことを裏付けているのではないでしょうか。

収集された民具の総数は、平成9年10月現在で3,421件5,808点、県下市町村の中でも屈指の内容を誇るまでになっています。こうした民具の活用方法のひとつとして、栗東歴史民俗博物館ではこれまでに栗東の民具シリーズと題し、「くらしと道具」「衣服とくらし」「カゴとフゴ」「田と畑の道具」「桶(おけ)と曲物(まげもの)」「食とくらし」「すまう」などの展覧会を行ってきました。出品資料のほとんどは収集した資料を主とし、一部は修復したものや借用したもので地域を特徴付けできるように工夫しています。また、こうした展覧会は、小学生の授業に合わせるような時期に開催し、解説などはなるべく平易にしています。あるいは、小学三年生の単元である「自分たちのまわりの100年間のくらしの移り変わりをしらべてみよう」では、実際に子どもたちを博物館へ招いて収集した民具や道具を使ったりさわったりして、道具がどのように新しくなってきたのかを考えたりしています。また移築復元した旧中島家住宅では、行灯やランプに火をともして当時の明るさを体験したりする「校外学習」に使われています。

土臼の修理をする故太田為之氏(栗東町宅屋)

民具製作地の特定

民具の所在を確認していく作業を進める中で、特定の資料に規格性があることに気付くことがあります。今回の調査においても、ふたつの資料にきわめて類似した共通性があるものにぶつかっています。

そのひとつは、籾を玄米と籾殻にわける時に使用する「土臼(どうす)」です。農家がどのようにしてこの臼を入手するのかを聞き取りしていくと「出庭(でば)」もしくは「宅屋(やけや)」の職人が来て製作もしくは修理するものであるといいます。「出庭」と「宅屋」は、現在でもある栗東町の村です。この二つの村で土臼製作の話を聞いてみると、多くの方が土臼の製作に関わっていたことが判明してきました。農繁期をのぞいて家の主人は、出職によって土臼の製作・修理を行い、北は八日市市や近江八幡市、東は甲賀郡土山町、南は京都府南山城地方、

西は大阪や兵庫までをテリトリーとする出職による職人たちであったことが判明しました。臼には籠臼と桶臼の二種類あり、地元では一目で誰の作った臼かが分かると言います。一般には見分けのつかない物でも製作者の工夫や仕事の癖によって特徴があるのだといい、博物館で収集した臼を実見していただくと「ああ、これは○○さんの仕事だ」となるのです。こうした臼の仕事は、家々によって父親から子どもへと受け継がれ、昭和30年代に農業が機械化されるまで近隣の村々では大切な職人として扱われてきました。定期的に得意先を回るこの人々は、決して多くの道具を携えていったのではなく、臼の一番大切な歯の部分である樫の割板を必要な分だけ持って回ったといいます。必要な材料である竹や土、塩は臼の所有者が準備しておくもので、時には泊まり込みで何台もの修理をすることがあったといいます。また、樫の原木から歯を割り出した後、旋で削るつらい作業は女性たちに頼っていました。

もうひとつが、「藤箕」です。米や大豆などのゴミを選別したり運んだりする時に重宝な民具ですが、栗東町高野や辻村には箕を製造する家が9軒ほどあったといいます。藤箕

藤箕を製作する饗庭優氏(栗東町高野)

の製作は、農閑期である12月から3月末と8月から10月上旬の間に行われていました。この箕の製作は出職ではなく居職によって行われ、主たる材料である藤蔓は、これを専門に採取する職人に頼んでいました。その多くは金勝山や日野町の奥山から入手しています。竹もまた竹の職人から手に入れ、加工を行うのが藤箕職人の技量だったといわれます。博物館収蔵民具の中で箕を検索すると90パーセントが藤箕であり、いかに当地の人々がこの箕を好んで使用したかが分かります。この民具である藤箕もまた家内工業的に繰り返しおこなわれてきたもので、藤を叩いてほぐす作業や藤の繊維から紐を作る作業は、女性たちに頼っていました。入手した藤は1週間ほど乾燥させ、生乾きの状態で横槌でたたいて軟らかくしていきます。こうすると外皮であるアマカワと芯の部分がうまく分けられます。藤箕は、竹を十文字に組み横方向に藤を足しながら編み進むのが特徴で、箕の縁の部分にはねばりの強いネソやモロの木が用いられています。それぞれの職人には、それぞれの製作上の特徴があり、仲間の間では一目で識別できたといいます。この藤箕の製作もまた、昭和30年代を境として農

修理を終えた土臼(栗東歴史民俗博物館登録資料)

藤　　箕（栗東歴史民俗博物館登録資料）

業の機械化の浸透に伴って衰退していきました。県下でこの藤箕の分布を調査してみると、湖南地方はもとより湖東地方にまで分布していることが分かります。そのことを裏付けるように地元では、五個荘町からの行商人へも卸していたといいます。

博物館の展示は単なるモノの展示にとどまらず、こうした製作者を介在させることによりさらに厚みのある展示になるのではないでしょうか。博物館の展示活動にとって心強い味方が地元にいることは、何よりも大切なことなのです。

博物館展示と民具

土臼、藤箕はともに栗東町域の村で製作され近隣へともたらされた道具たちです。しかし、博物館などへ収蔵された資料の多くは、製作地が特定されずに出番となる展示の機会を待っているものばかりです。栗東歴史民俗博物館では栗東の民具シリーズと題する展示から、これまであまり顧みられなかったこの生活道具に、提供した側の技術や製作道具などの視点を持ち込み、さらにその資料が地元でどのように使用され愛され続けたのかという使用者側の視点、またそうした民具がどのように流通していたのかという視点を織りまぜながらの展示を行っています。従来、民具は使用者自身が自分のために製作したいわゆる自給した道具を重視してきましたが、実際には半職人・専門職人による製品も多く、こうした職人によって製作された製品は諸国に流通し、ひとつの文化を作り上げてきました。

生活道具には大別すると村型と都市型のものがあります。村型の特徴は不変的であり保守的なものであり、都市型は可変的で流動的なものであるといえます。こうした相違は、暮らしを成り立たせている生業の日常生活上の位置の相違であると考えられます。生活の基盤となっている生業が、村型では住空間に包括された形で近隣との関係であり、一方都市型では住空間では異生業のピラミッド形の集団なのです。村社会で必需品とされ生産された道具、都市社会で必要に迫られ生産された道具。両軸が接近し交流することによって精錬（せいれん）されていった道具。そうした基盤の中からともに製作され流通し、今日博物館で収蔵されるに至った生活道具を村型・都市型双方の視点から問い直し、暮らしを支えてきた生活道具を見つめ直すことは、今後の歴史系民俗系博物館に課せられた命題（めいだい）といえましょう。

滋賀文化財教室シリーズ　No.183号
発行年月日　1999年1月5日
編集・発行　財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525